介護老人保健施設ライフサポートねりま

症　例　概　要　利用者氏名:　90歳代　男性　要介護1

病　　名:　アルツハイマー型認知症

利用ｻｰﾋﾞｽ:　入所

経　　過:　10年前に薬剤性間質性肺炎にて入院時、認知症の可能性を指摘され、以降外来受診にて投薬開始。認知症の進行傾向も確認。令和6年1月からデイサービスにて入浴介助。散歩可能も、6月ころから食思低下傾向。8月上旬に受診し、軽度腎機能障害の診断。翌日自宅で倒れているところを息子が発見され、救急搬送となる。誤嚥性肺炎疑いにて入院。

補液にて腎機能回復するも、不穏強く、家族と相談の元8月中旬自宅退院。食思低下は続き、歩行不安定、身辺動作に介助を要する状態で、8月下旬にリハビリ目的でライフサポートねりまへ入所された。

内　　容

入所当初、「ここはどこだ?」とすぐに立ち上がり、落ち着かない状態が続いていた。戸惑いと、食欲がない状態であり、提供される食事に手をつけないこともあった。元々、義歯が必要な口腔内であったが、義歯はボロボロでとても使える状態ではなかった。

帰宅願望が強く、歩き出してしまうのだが、耐久性はなくふらふらな歩容で転倒のリスクもあった。食事を摂れなければリハビリも捗らない。多職種で意見交換し、普通に食事をできる状態にするべく、義歯の調整と口腔環境を整えることにした。　義歯の調整は功を制し、食事摂取量の向上と共に、精神状態の落ち着きを取り戻していった。すると、ご本人の口から「妻は（ここにいることを）知ってるの?」と、帰宅願望の理由を聞き出すことができた。

入所から2か月経過する頃には、食事はしっかり全部食べられるようになり、耐久性も向上し、入所当初のふらふらした歩容はなくなり、自立した歩容状態になっていた。さらにご本人の口からも「自宅に帰りたい」という言葉も聞かれ、帰った後のことを考えた生活へとなった。

入所3か月経過した頃には、トイレ動作も自立し、自宅に帰ったあとも妻への負担も少なくした状態になっていた。

入所に戸惑い、環境への適応困難であった利用者に、親身な対応を通し、ご本人の意思を尊重し、奥さんの願いもかなえることができた事例であった。